

インターネット公開許諾のない文章には  
墨消し処理を施しています。

## 明恵高辨の華嚴教学

卷 山 量 導

明恵房高弁の教学の全体を教学史的に見て二期に分けて見られる。

才一期 独断時代

才二期 教学組織期時代

才一期は伝統主義者としての高弁の時代であり、出

家から四十歳に至る迄である。高弁は有名な「華嚴唯心義」「金師子章光顯鈔」を発表した時代であり、「唯心義」は仮名書きであり、郷里（紀州）の婦人達や親類の人々の為に請はれて唯心の略釈を作ったものであり、華嚴学古来の難問題の解釈に従っている、勿論他に学目的の目的があつて書いた著作である事は明瞭であり、旧仏教教学の伝統維持の精神に溢れており、一面には旧教学の祖述に努め、他面にはその正統思想に対する異端の破邪に力をこめている。又「金師子章光顯鈔」下巻に高弁は六相円融義に断惑成仏論を掲げておられる。断惑と成仏を精論する事と、もつとも重要な理由は（有人）の主張を破せんが為めである。即ち、

「有人云。一断一切断者。即一人断惑時一切有情皆断惑。言一成一切成者。一人成仏時即一切有情皆成仏也。」（大日本仏教全書、華嚴小部集、金師子

章光顯 卷下、四十五頁）に有人の説があり、当時一部の華嚴学者は実践原理としての断惑成仏の問題を華嚴得意の絶対的な態度に立つて唱導していたと思われ、これに高弁は論証したのである、一人惑を断ずる時一切の

有情は皆惑を断ず、一人成仏する時、一切有情は皆成仏する」と述べてあり、一人の断惑が一切の有情を断惑するという説に対して、断惑は自類相對に約し成仏は自他相對に約して解す可きであるとしている。

又二期は、「選択集」の難破にあるけれども、新教学の建設への転回期で伝統的な華嚴教学から自己の教学えとうつり変つていく時期である。源空が出て自己の信仰の立場たる華嚴学と相反する新思想が現われたので、最初は源空を人格的尊敬から直接の難破をさせておられたが、源空死後門下から異端的な思想が現われるに及び、源空の教学を批判されたのである。即ち、

「至上人入滅之頃興行倍盛。專鑄于板印以爲後代重宝。永流於一門而敬重如仏經。」

（日本大藏經四十二、華嚴宗章疏、一向専修宗選択集中、摩訶輪卷上、一頁）に選択集を見に及んで始めてその説が在家千万の門徒の邪見を生ぜしめる所以を解したと云い、依つて奮然破邪の筆を執るに至つたものなる事を自記されている。又選択集には二大過失を高弁は述べておられる、二大過失とは、

「一、撥去 提心過失」

「二、以聖道門 譬群賊過失」（日本大藏經四十二、

華嚴宗章疏、一向専修宗選択集中、摧邪輪卷上、一頁）

とあり、一は、専修念仏が菩提心を輕視する事、二は、聖道門を盜賊に譬えた事に対する批難であり、しかし選択集を破したが、浄土念仏そのものを破したのではない、選択集がいかに鎌倉時代に宗教的影響の意義なき論文であつたなら選択集は破せられなかつたと思う。当時源空の門下に在時滅後にいたりて源空の真意を誤解して、法を誤つて解釈をした者が出た為に見逃し難くその由来を選択集に求めて破せられたと考えられる。源空は念仏の一行を以て往生の正業とし、高弁は菩提心を以て成仏の根本とされた所ろが見解の別である。選択集を高弁は破せられたが、高弁は建保三年十一月には「三時三寶礼釈」一卷を作つて自己の菩提心主義を明確に現わされ思想信仰を積極的に表明されたのである。三時三寶礼は三寶礼であるけれども、事實は菩提心の礼拝であり、此の信仰について高弁自身の記するところによれば、即ち、

「南無同相別相住持仏法僧三寶。生生世世

値遇頂戴。万相莊嚴金剛界心。大勇猛幢智  
慧藏心。如那羅延堅固幢心。如衆生海不可  
尽心。生生世世皆悉具足」(日本大藏經四十二  
三時三寶札、一頁)とあり、長い文句の三寶札は私自  
身のものであつて諸君には勧めないと述べておられ、又  
在家の男子女人は「南無三寶後生タスケサセ給へ」(日  
本大藏經四十二、三時三寶札、十四頁)と唱へてもよい  
と云い、三寶札は易行易修である事を説いておられる。

在家の人々に菩提心信仰を簡単に実践出来る様に努力さ  
れた点がうかがわれる、又浄土門の信仰と衝突するもの  
でない事細かく述べておられる。この様な事で高弁は源  
空の信仰に対して一方破邪を加へられたが一方その受け  
る影響の大きかつた点がうかがわれる。高弁は華嚴を祖  
述し、その信仰を以て宗教に対する中心思想とし一面真  
言密教に回想を試み、他面禪への憧憬を一層深く研究さ  
れ、又信仰の実体として禪の三昧、浄土門の信心等に対  
しては高弁は觀法を持いられ、高弁の教学の大成された  
時代は一般の墮落と共に仏教教団の混乱期でもあり真実  
の教を求めるためには混乱期であり真実の教を自己の内

觀に求めて解脱に苦心されており高弁の生涯の教学は体  
験に根拠を有しており伝統的正統主義であるけれども深  
き体験に立ち高弁独自の新しい教学信仰を組織すること  
に努力された僧侶であつた。

## 道元禪師と親鸞上人の 信についての考察

一 加藤 敏 明

道元禪師の仏法は要約すれば、信即証、信即仏という  
ことが出来得るであろう。「正法眼藏菩提分法卷」に五  
根の才一の信根を示して

信根はしるべし自己にあらず、陀已にあらず、自己  
の強為にあらず、自己の結構にあらず、他の牽挽にあ  
らず、自己の規矩にあらざるゆえに、東西密相付なり、  
といつてゐる。一般教学において信根は、仏法僧の三寶  
や、四諦を信することゝされている。その根といわれる  
所以は、信、精進、念、定、慧の力によつて諸々の善法